

知っ得コーナー

◆ 名栗の駒寄せ ◆

前川 房夫

伝統的な町家の表に飾る意匠として建物、塀を保護するための犬矢来、竹や木材を組み合わせて垣とした駒寄せ矢来、積荷を運んできた牛馬の侵入を防ぐための駒寄せがある。旧市内の所々で名栗、丸棒、金属等の駒寄せを見ることができます。西川庄六郎の案内絵馬額の処に名栗越しの板塀があります。その前面に頼りなく思われますが六角名栗の駒寄せの柵が施されています。名栗とは、栗材を角材や板にして突きミノ、ちょうな等で独特の削り痕を残す日本古来の加工技術です。栗材は堅く湿気にも強く加工し易い。昨今では栗材は家の土台や雨のかかる場所、以前は鉄道の枕木として利用されました。名栗の起源は天保年間丹波のきこりが丸太を運搬する際、虫を呼ぶ特有の臭気が辺りに広がり、その為虫に食われないよう皮、シラタを削り取り加工されたもので六角の柱に横一線に突きミノで削ると柄がくつきり浮かび上がります。丹波の大工が京都の社寺、大店等に出入することで近江の商人とも知り合い五個荘金堂地区には多くの意匠として見ることができます。名栗にも六角名栗、四角名栗等があります。八幡町家における間口の意匠として昭和時代までは多く見られましたが昨今では突きミノで加工された名栗駒寄せは新町通り、魚屋町通りの数か所しか見ることができません。

趣味のコーナー

◆ 詩吟 ◆

中村 保

私は生まれつき体が弱く、ぜんそく持ちで風邪をこじらせると、ぜんそくが出て治るまで1か月位かかります。詩吟を熱心に始めたから、いつの間にか風邪もあまり引くことが無く少し元気になりました。勿論、詩吟をやったからといって誰も無条件に健康になるものではないかもしれません。

詩吟のルーツは、江戸時代幕府が漢詩教育に力を入れ、武家の子弟を学問の補助として、また情操教育として漢詩を素読する時に独特の節をつけて詠んだことが始まりです。これが好評で江戸中期頃には私塾・藩校でも盛んに詩吟が行われた。これがさまざま変遷を経て、今日まで受け継がれました。現在詩吟の流派は数百と言われるほど数多くあります。

詩吟の素材は漢詩が主ですが、日本古典や短歌（和歌）・俳句等を声を出して音読することは、脳の多く

の場所を活発に働かせ、前頭前野を鍛えることとなります。

腹式呼吸で身体に響く声を出すことで、酸素を多く取り込み、血の巡りがよくなり、一人でも気楽に楽しめ、身体の活性化とストレスの発散に役立ちます。最近では健康の為に始める人が増えています。

新型コロナ対策のトレーニングにもなります。

先輩ガイドから学ぶ

◆ 岩戸 開治さんにインタビュー ◆

大阪 義信

2006年（H18年）入会当初は5人でしたが、今では中村友宥さん、高橋幹男さん、私の3人になりました。

歴史が好きで当時の知人の紹介で今のような「ふるさと観光塾」や研修も無く簡単に入会したのです。その後広報部長、研修部長を歴任されました。その中で一番印象に残っているのが、「八幡堀復旧工事」です。特に現役で働いていた仕事の関係で高度成長時代で琵琶湖の水運から陸地の鉄道、トラックの運行になり八幡堀の役目が無くなり、八幡堀の埋め立て計画がほぼ決定していたものが急に中止になり景観事業復旧計画に変わった事です。A案がA'案になり、さらにウルトラC案になったのですから疑問に思っていました。八幡堀周辺の住民からも「早く埋め立てるとの苦情が多く出ているぐらいでしたから」その中で復旧事業になりヘドロの堀から今の八幡堀が甦ったのです。「埋め立ててしまえば何も残らない」町の声で決定していた計画を県や国を動かし景観復旧事業を成し遂げた先人の心意気に感心させられました。「建物や景観を説明することは大切ですが、その奥にある、町は人がつくる！その心意気の大切な事を伝えたい」と熱く語られる。

今でも現役でバリバリガイドをされ、堀の水質調査をされている先輩にあこがれています。

編集後記 柳生 佳良子

いつも原稿投稿ではお世話になっております。2020年最後の「てんびんガイドだより」です。内容はいつも充実、趣向を凝らしています。読まないで損するかもね！！新年号の新春挨拶には沢山の投稿をお待ちしていますので、よろしく願いいたします。

